

## 審査の結果の要旨

氏名 伊藤 雄太

論文題目 茶室の形態構成に関する基礎的研究

本論文では茶室の形態構成とその意匠様式について、数理的、統計的な観点から分析し、茶室の各意匠様式がどのような要素で構成されている傾向があるのか考察している。研究目的は、その分析過程を通してこれまでの歴史学的知見を支持、あるいは新たな知見を得ることにある。研究対象となった茶室は主に室町時代後期から江戸時代末期まで（一部、修復や復元などの理由で昭和時代の茶室を含む）の70事例である。背景として、各茶室がどのような意匠様式に属しているのか研究者同士で概ね共通した見解はあるものの、その分類基準が研究者、書籍、あるいは茶室ごとに異なっており、コンピューターによる統計解析の技術が発達した今日においては、改めて検証し統一的な見解を打ち出す必要があることが挙げられている。

本論文は5つの章で構成されている。

第一章では、まず茶室の歴史的発展の変遷を追い、様式や作風、茶匠の好みなど茶室研究分野に存在する分類について述べた上で、これまでの歴史学的アプローチによって定義されてきた各様式の分類基準の曖昧性を問題点として指摘している。そして本研究の目的は数理解析を通して、曖昧にされてきた分類基準を明確にし、新たな知見を得ることを研究の方向性として明確に打ち出している。

第二章では茶室研究と数理解析の歴史的な流れを体系的に整理、把握した上で、本研究がその両者の延長上にあると位置づけている。ここで示されている研究手法はこれまでの茶室研究で培われてきた資料を基に、多変量解析などの手法で統計的に分析するということである。具体的には構成要素の有無や物理量に着目して多変量解析を行い、茶室の各意匠様式の類型的構造を把握、そして過去の歴史学的見地との比較から新たな知見を得ることを示している。

第三章では構成要素の有無に着目して、茶室の創建年代、様式、作風、茶匠の好みの分類基準とその形態構成の傾向を分析している。分析手法には相関分析、クラスター分析、数量化理論三類などの多変量解析を使って、統計的に各様式が持つ構成要素の傾向を把握した。その結果、大目構が主な構成要素とされてきた草庵茶室が躡口や窓を基本構成要素としていること、利休好みと有楽好みが極めて似た構成の茶室であることなど新しい知見を得ている。

第四章では前章の分析結果と考察を踏まえ、草庵茶室のみを対象にして構成要素の物理量に着目し、作風と茶匠の好みの分類基準とその形態構成について分析している。分析手法にはクラスタ分析に加え、物理量データの分析に有用な主成分分析を用いた。そして、極小空間と考えられていた利休風茶室が実はそうでなかったこと、武家風茶室が窓を多用することや貴族風茶室の構成が自由であることなど、新たな知見を得ることやこれまでの知見を支持できることなどを示唆する結果が出た。

第五章では三章と四章で得られた知見をまとめて、それらを新たな学術的知見と定義、位置づけている。また茶室を一貫して分析対象として様々な多変量解析を行ってきたことから、各解析手法の特徴について考察した上で、今後の研究展望として近代建築など別の建築を対象に本論文の手法を応用することを述べている。本研究の意義はこれまでの歴史学的アプローチとは異なる数理的観点から統計的かつ総体的に茶室を分析した初めての研究ということができ、ここで得られた知見は今後の茶室研究において新たな学術的知見として定義できよう。

最終審査会では、これまでの歴史学的議論（茶室の意味論や構造論など）を一度は脇に置いて数理解析というフラットな観点から茶室を分析し新たな歴史学的知見を得ようと試みたことがテーマとして新しいと評価された。また分析手法に関しても、いろいろな解析手法に手を出してデータや分析結果をいじくりまわすことなく、限られた多変量解析のみで徹底的に分析、検証したことは評価に値する。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。